

インドからの帰還と戦争と奇蹟を求めて古い思考+スクールに関する質問+新たな旅の計画+東洋とヨーロッパ+モスクワの新聞紙上の批評+インドに関する講演+Gとの出会い+

△委装した男△+最初の会話+スクールの疑問+Gのグループ+『真理のきらめき』+

その後の会見と会話+Gのモスクワのグループの組織+会費とワーキングのための資金に関する質問+秘密性と弟子の守る義務に関する質問+東洋についての会話+△哲学△+理論△+実践△+

システムはいかにして見出されたか+Gの考え+外からの影響に支配された△機械としての人間△+すべては△起△る△+誰一人何一つ△為△せない△+△為△す△ために△存在△する△必要がある△+

人間は自分の行動に責任があるが、機械にはない△機械の研究に心理学は必要か△+△事実△の約束+戦争を止めることができるか+生ける存在としての惑星と月に関する話+太陽と地球の△知性△+

△主観△芸術と△客観△芸術

一九一五年のベテルスブルグ+ベテルスブルグのG+グループについての話+

△秘教的△ワークへの言及+△年夢△と△牢獄からの脱出△+△脱出△には何が必要か+

誰がどのように助けてくれるか+ベテルスブルグでのミーティングの始まり+

再生と死後の生に関する質問+いかにして不死性を得ることができるか+△イエス△と△ノー△の葛藤+

正しい基盤と誤った基盤の上の結晶化+犠牲の必要性+Gとの対話と観察+

カーベットの販売とカーベットに関する話+Gの自分自身についての話+

古代の知識と、なぜそれが隠されているかについての質問+Gの答え+知識は隠されてはいない+

知識の物質性と、与えられる知識に対する人間の拒否+不死性についての質問+△人間△の四つの体△+

金属の粉末がまった蒸留器の例+ファキールの道、修道僧の道、ヨギの道+△第四の道△+

文明と文化は存在するか

人間に関するGの基本的見解+調和の欠如+多数の△私△+人間機械の構造+精神的諸センター+

Gが自己のシステムを説明する方法+避けがたい反復+人間の進化とは何を意味するか+

機械的進歩は不可能である+人間の進化に関するヨーロッパの考え+

自然界のあらゆるものの結合性+人間と月+集団に対する個人の利点+

人間機械を知ることの必要性+人間における恒久的△私△の不在+小さな△私△の役割+

人間における個性性と意志の欠如+東洋の寓話+家と召使い+△執事代理△+

釘の上に寝る+ファキールと仏教徒の魔術に関する話

Gのシステムの全体的印象+過去を振り返る+基本的命題の一つ+知識の道と存在の道+

さまざまなレベルの存在+存在の道からの知識の道の逸脱+

存在の変化の伴わない知識の発達、あるいは知識の増大を伴わない存在の変化は何を生みだすか+

△理解△とは何か+知識と存在の結合の結果としての理解+理解と知識の違い+

三つのセンターの機能としての理解+なぜ人々は理解できないものに名前をつけたがるのか+

我々の言語+なぜ人々は理解しえないのか+△人間△という言葉とそのさまざまな意味+

システムで使われる言語+△人間△という概念の七段階+システムにおける相対性原理+

人間の段階と平行する段階+△世界△という言葉+そのさまざまな意味+

相対性原理の観点から見た「世界」という語の考察+宇宙の基本的法則+  
 三原理の法則、あるいは三つの力の法則+現象が起こるための三つの力の必要性+第三の力+  
 なぜ我々は第三の力を見ないのか+古代の教えにおける三つの力+  
 「絶対」の意志による世界の創造+世界の連鎖、あるいは「創造の光」+  
 それぞれの世界における法則の数

5

創造の光

宇宙の機構に関する講義+創造の光と「絶対」からのその進展+科学的見解の矛盾+  
 創造の光の終結点としての月+「絶対」の意志+奇蹟という考え+宇宙における我々の位置+  
 月は有機生命体を食べて生きている+月の影響と月からの解放+異なる世界の異なる「物質性」+  
 「振動」の世界としての世界+振動は「絶対」からの距離に比例して弱まる+七種の物質+  
 人間の四つの体とそのさまざまな世界との関係+地球はどこにあるか+  
 三つの力と物質の宇宙的特性+複雑な物体の原子+物体を通して現われる力による物体の定義+  
 「炭素」「酸素」「窒素」「水素」+三つの力と四つの物体+人間は不死か+不死性とは何か+  
 四つの体をもつ人間+神学生と全能の神の話+月についての話+時計の分銅としての月+  
 普遍的言語についての話+最後の晩餐の説明

6

センター

目的について+この教えは確固たる目的を追求できるか+存在の目的+個人的目的+  
 未来を知ること+死後の存在+自己の主人になること+キリスト教徒であること+人類の救済+  
 戦争を止めること+Gの説明+運命、偶然、意志+「狂った機械」+秘教的キリスト教+

人間の目的はいかなるものであるべきか+内的奴隷状態の原因+解放への道は何から始まるか+  
 「汝自身を知れ」+これに関するさまざまな理解+自己研究+いかにして研究するか+自己観察+  
 記録と分析+人間機械の働きの基本的原理+四つのセンター—思考、感情、動作、本能+  
 センターの働きの識別+機械の働きに変化を起こす+平衡をくずす+  
 機械はいかにしてこの平衡を回復するか+付随的变化+センターの誤った働き+空想+白昼夢+  
 習癖+自己観察のために習癖に抵抗すること+否定的感情の表現に対する闘い+機械性の記録+  
 正しい自己観察から生じる変化+動作センターという考え+人間の行動の通常の種類法+  
 センターの区分を土台にした分類法+自動性+本能的行動+本能機能と動作機能の違い+  
 感情の区分+センターのさまざまなレベル

7

三の法則・七の法則

宇宙意識は獲得可能か+意識とは何か+自己観察の間に気づいたことについてのGの質問+  
 我々の返答+我々は最も重要な点を見落としているというGの批評+  
 なぜ我々は自己想起していないことに気づかないのか+  
 「それが観察し」+それが考え+それが話す+自己想起の試み+Gの説明+  
 新しい問題の重要性+科学と哲学+我々の経験+注意の分割の試み+意識的自己想起の最初の感覚+  
 我々は過去の何を思いたすか+さらなる経験+目覚めた状態における眠りと覚醒+  
 ヨーロッパ心理学の見過+しているもの+意識という考えの理解における相異+  
 人間の研究は世界と並行している+  
 三の法則を追って+宇宙の基本的法則に至る—七の法則、あるいは「オクタ、ハ、ハ」の法則+  
 振動の非連続性+「オク、ター、ウ」+七音階+「イン、ター、ヴァル」の法則+付加的ショックの必要性+

付加的ショックがないと何が起るか  
 為すためには付加的ショックをコントロールできなくてはならない  
 付加的ショックは、  
 内的オクターヴ＋ハイインターヴァルの位置にある有機生命体＋惑星の影響＋  
 側面オクターヴ、ソード＋ラ音、ソ音、ファ音の意味＋ド音、シ音の意味＋ミ音、レ音の意味＋  
 地表の変化における有機生命体の役割

8

〈本質〉と〈人格〉

328

意識のさまざまな状態＋眠り＋覚醒の状態＋自己意識＋客観意識＋自己意識の欠如＋  
 自己意識獲得の第一条件＋意識の高次の状態と高次のセンター＋  
 普通の人間の自己覚めた状態は眠りである＋眠れる人々の生十  
 いかにして覚醒することができるか＋生まれたときの人間＋  
 教育とまわりの人々が演じる役割＋人間の可能性＋自己研究＋心理的写真＋  
 一人の人間の中のさまざまな人間＋私とハウスベンスキー＋誰が能動的で誰が受動的か＋  
 人間とその仮面＋自己修練の第一段階としての自己分割＋人間の存在の基本的特質＋  
 なぜ人間は自己を想起できないか＋自己同一化＋内的考慮＋外的考慮＋  
 機械的／外的考慮とは何か＋不正＋誠実さと弱さ＋緩衝器＋良心＋道徳＋  
 すべてに共通する道徳は存在するか＋キリスト教道徳は存在するか＋  
 すべてに共通する善悪の観念は存在するか＋誰も悪のためには何一つしない＋  
 善に対するさまざまな観念とそれが生み出すもの＋善悪の恒久的観念は何を基盤にしうるか＋  
 真偽の概念＋緩衝器とそうそに対する闘い＋スクールにおけるワークの方法＋服従＋  
 自分の無であることの自覚＋本質と人格＋死せる人々十一般的法則十金に関する質問

9

水素論・食物論

371

放射線、三つのオクターヴの形の創造の光＋  
 我々の生と、宇宙のさまざまな段階における物質と力との関係＋  
 宇宙オクターヴのインターヴァルとそれを埋めるショック＋宇宙の点＋振動の密度＋  
 三つの力と四つの物質＋炭素＋酸素＋窒素＋水素＋十二の三つ組＋水素表＋  
 化学的、物理的、心靈的、宇宙的特質に照らしてみたい物質＋物質の知性＋原子＋  
 人間のあらゆる機能と状態はエネルギーに依存する＋人体中の物質＋  
 エネルギーを節約しさえすれば、人間は自己修練に十分なエネルギーをもっている＋  
 エネルギーの浪費＋上質のものを粗悪なものから分けることを学べん＋上質な水素の生産＋  
 存在の変化＋内的体の生長＋三層の工場としての人体＋三種の食物＋  
 食物、空気、印象の有機体内への進入＋物質の変質はオクターヴの法則に支配されている＋  
 食物オクターヴと空気オクターヴ＋高次の水素の抽出＋印象オクターヴは進展しない＋  
 印象を受けとった瞬間に人為的ショックをつくり出す可能性＋意識的努力＋自己想起＋  
 その結果印象オクターヴと空気オクターヴは進展する＋第二の意識的ショック＋感情と関連した努力＋  
 この努力の準備＋人体と宇宙の相似性＋人間機械の進化における三段階＋感情の変性＋錬金術＋  
 諸センターは異なる水素で働く十二つの高次センター＋低次センターの誤った働き＋  
 あらゆる内的プロセスの物質性

10

道・宇宙論

311

道は何から始まるか＋偶然の法則＋影響の種類＋生活の中でつくられる影響＋  
 その起源においてのみ意識的な、生活外でつくられる影響＋磁気センター十道を捜す十

道を知る人を見つける+第三種の影響+意識的かつ直接的影響+偶然の法則からの解放+  
 <ステップ>階段<導>+第四の道の特殊な条件+誤った磁力センターも可能である+  
 いかにして誤った道に気づく+教師と弟子+知識は宇宙に関する教えから始まる+  
 二つの宇宙の通常の概念->マクロコスモス<と>ミクロコスモス<と>十七つの宇宙の教え+  
 諸宇宙間の関係はゼロと無限の関係である+相対性原理+土方への道は同時に下方への道である+  
 奇蹟とは何か+次元の周期+多次元理論の観点から見た宇宙システムの概観+  
 <時間呼吸である>というGの発言+ミクロコスモスは人間か、それとも原子か

11

グループ

337

<一粒の麦もし死なずば、ただ一つにてあらん>+金言集+目覚める、死ぬ、生まれる+  
 再生を妨げるものは何か+<死>を妨げるものは何か+覚醒を妨げるものは何か+  
 自己の無であることの自覚の欠如+自己の無であることを自覚するとはどういうことか+  
 この自覚を妨げるものは何か+生の催眠的影響+  
 人間がその中で生きている眠りは催眠的眠りである+魔術師と羊+ハンタリー+空想+  
 目覚まし時計+組織化されたワーク+グループ+教師なしでグループのワークは可能か+  
 グループでの自己研究+鏡+観察の交換+一般的条件+個人的条件+規則+主要な欠点+  
 自己の無であることの自覚+模倣的ワークの危険性+障壁+真実とうそ+自己に対する誠実+努力+  
 蓄積機+大蓄積機+知的ワーク+感情のワーク+感情の必要性+  
 知性を通しては理解できないことを感情を通して理解することの可能性+  
 感情センターは知性センターよりも微妙な器官である+蓄積機との関連から見たあくび+  
 生における笑いの役割と意味+高次センターにおける笑いの欠如

12

性エネルギー

370

グループでのワークがより集中的になる+人間の限られた役割のレバトリ+  
 自己修練+平穩な生活の選択+服従の難しさ+課題の位置+Gが課題を与える+  
 友人たちのこの思想に対する反応+システムは人々から最善もしくは最悪のものをひき出す+  
 どんな人々がワークに加われるか+準備+失望が必要である+苦しんでいる問題+友人の再評価+  
 タイプに関する話+Gはもっと難しい課題を与える+自分の生活を話す試み+抑揚+  
 <本質>+<人格>+誠実さ+嫌な気分+Gはいかなる質問にも答えると約束する+  
 <永却回帰>+本質と人格の分離実験+性についての話+  
 あらゆる機械性の主要な源動力としての性の役割+解放の主要な可能性としての性+新生+  
 性エネルギーの変性+性の誤用+禁欲は有益か+センターの正しい働き+恒久的重心

13

奇蹟

406

内的ワークの強度+<事実>に対する準備+フィンランド訪問+奇蹟が起こる+  
 Gとの心的<会話>+<君は眠っていない>+眠れる人々を見る+  
 普通の手段では高次の現象の探索は不可能である+<行動の方法>に対する見解の変化+  
 <主要な特徴>+Gの定義する人々の主要な特徴+グループの再編成+ワークを離れた人々+  
 二つの椅子の間に坐る+復帰の難しさ+Gのアパート+沈黙に対する反応+<うそ>を見破る+  
 実例+いかにして目覚めるか+いかにして必要な感情状態を生み出すか+十三つの方法+  
 犠牲の必要性+<自分の苦しみを犠牲にする>+拡大された水素表+<動く>+<新発見>+  
 <我々にはほとんど時間がなく>

普通の言語で客観的真理を伝達することの難しき客観的知識と主観的知識と  
 多様な調和と客観的知識の伝達と高次のセンターと神話と象徴と定式文句と  
 へ上がろうであるように、下もまたそうであるへへ汝自身を知れへ二元性へ  
 二元性の三元性への変性へ意志の進路へ四元性へ五元性へ五七星の構造へ十五つのセンターへ  
 ソロモンの印章へ数、幾何学的形、文字、言葉の象徴性へ象徴学へ象徴の正しい理解と誤った理解と  
 發達のレベルへ知識と存在の調和へ偉大なる行為へ  
 へ人は所有してはいないものを与えることはできないへ自己の努力のみを通しての達成へ  
 象徴学を使う既知のへ愈へこのシステムとその位置へこの教えの主要なシンボルへエニアグラムへ  
 三の法則と調和した七の法則へエニアグラムの考察へ  
 へ人間はエニアグラムにあてはめることのできないものは理解してはいないへ動くシンボルへ  
 運動によるエニアグラムの経験へエクサイズへ普遍的言語へ客観芸術へ主観芸術へ音楽へ  
 客観音楽は内的オクターヴに基づいているへ機械的な人間は主観芸術しかもつことはできないへ  
 人間の存在のさまざまなレベル

相対的概念としての宗教へ宗教は人間の存在のレベルに相応するへ祈りは助けになりうるかへ  
 祈りの習得へキリスト教に関する一般的な無知へスクールとしてのキリスト教会へ  
 エジプトのへ暗誦のスタイルへ儀式の重要性へ宗教のへテクニクへ  
 身体はどこでへ私へという言葉が響くかへ真の宗教の二つの部分とその教えへカントと等級の概念へ  
 地上の有機生命体へ創造の光の生長へ十月へ有機生命体の進化部分は人類であるへ行きづまる人類へ

変化は十字路でのみ可能であるへ進化のプロセスは常に意識的な核の形成から始まるへ  
 進化に抗して闘う意識的力はあるかへ人類は進化しているかへ

へ意識的人間二百人で、地上の全生物を変えることができるへ十三つのへ人間の内的サークルへ

へ外側のサークルへへ外側のサークルへに至る四つの門としての四つの道へ第四の道のスクールへ

偽エンテリック組織とスクールへへその形をとった真理へ

東洋のエソテリック・スクールへ秘儀伝授と秘教儀式へ自己伝授のみが可能である

一九一六―一七年度の歴史的事件へ

矛盾の迷路のガイド、あるいはへノアの箱舟へとしてのGのシステムへ物質の意識へ

その知性の段階へ十三層、二層、一層の機械へ人間は人間、羊、虫から成るへ

三つの宇宙的特性へ食物、呼吸するもの、生活環境へによる全生物の分類へ

人間はその食物を変えることができるかへへ生きとし生けるものの図表へ

G、最終的にベテルスブルグを離れるへおもしろい小事件へへ変貌へへ造形美術へかへ

ジャーナリストの見たGへニコライ二世の没落へロシア史の終焉へロシア脱出計画へ

Gからの便りへモスクワでのワークの継続へ図表とコスモスに関するさらなる考察へ

へ時間は呼吸であるへという考えを、人間、地球、太陽、大小細胞に結びつけて発展させるへ

へさまざまな宇宙の時間表への作成へ十三つのコスモスの中には宇宙の全法則があるへ

コスモスの思想の、人間有機体の内的作用への適用へ

分子と電子の生命へさまざまなコスモスの時間の次元へミンコフスキーの定式の適用へ

さまざまな時間と人体のセンターとの関係へ高次センターとの関係へ

グノーシス文学とインド文学における時間の宇宙的計算  
 へ休養したければ私のどこにきなきいへアアレクサンドロポールにGを訪ねる十  
 Gとその家族との関係十集團狂気の真只中では何一つすることはできない十  
 へ事態は我々には完全に不利なわけではない十いかにしてへ私の感覚を強めるか  
 ベテルスブルグとモスクワへの短期間の帰還十そのグループへの伝言十  
 ビアチゴルスクへ戻る十十二人がエッセントッキに集まる

17

一九一七年夏

390

一九一七年八月十エッセントッキでの六週間十G、ワーク全体の見取り図を説明する十  
 へスクールは命令的なものだ十へ超努力十センターの連動は自己修練の最大難関である十  
 身体の奴隷としての人間十不必要な筋肉の緊張によるエネルギーの浪費十  
 G、筋肉のコントロールと弛緩のためのエクセサイズを見せる十へストップへエクセサイズ十  
 へストップへの命令十G、中央アジアでのへストップへに関する挿話を語る十  
 エッセントッキでのへストップへの影響十おしゃべりの習慣十断食の実験十罪とは何か十  
 G、注意力に関するエクセサイズを見せる十呼吸の実験十道の困難さの自覚十  
 深遠なる知識と努力と助力の不可欠性十このへ道への他には道はないのか十  
 タイプに応じて人々に与えられる助力としてのへ道十  
 へ主観的へ道とへ客観的へ道十オビヴァチエリ十真剣であるとはどういう意味か十  
 ただ一つのことだけが重大である十いかにして真の自由を獲得するか十隷属と服従の険しい道十  
 何を犠牲にする用意があるのか十アルメニアの童話十占星術とタイプ十実演十  
 G、グループの解散を告げる十ベテルスブルグへの最後の旅

18

離脱

365

ベテルスブルグ、一九一七年十月十ボルシェヴィキ革命十ローカサスのGのところへ帰る十  
 弟子の一人に対するGの態度十エッセントッキでのGと小数の仲間十仲間が増える十ワーク再開十  
 エクセサイズは前より難しく、多様になる十精神的、肉体的エクセサイズ、ダーヴィッシュ・ダンス、  
 心霊的ヘトリックの研究十絹を売る十内的葛藤と決断十グルの選択十離脱の決意十  
 G、ソチへ行く十苦しい時期十戦争と伝染病十エニフラムのさらなる研究十  
 へ事件十ロシアを離れる必要性十最終目的地十ロンドン十  
 自己修練の実際的成果十新たなへ私への感覚、へ不思議な自信十  
 ロストフにグループを集めてGのシステムを講義する十G、ティフリスに学院を開設十  
 コンスタンティノープルへの旅十人を集める十Gの到着十新たなグループがGに紹介される十  
 ダーヴィッシュの詩の翻訳十芸術家、詩人としてのG十コンスタンティノープルに学院を開設十  
 G、本の出版を認める十G、ドイツに行く十  
 コンスタンティノープルでのワークを一九二二年、ロンドンで継続十  
 G、フォンテニスブローに学院開設十シャトー・プリオーレでのワーク十  
 キャサリン・マンズフィールドとの会話十G、さまざまな種類の呼吸について話す十  
 へ運動を通しての呼吸十ナバリ、シャンゼリゼ劇場でのデモンストレーション十  
 一九二四年、G、アメリカに発つ十ロンドンで独立してワークを続けることを決意

あとがき

393